

第1回 フレーパーク講座【結果報告】

日時：平成27年3月15日（日）13:00~15:00
場所：アステ川西6Fアステ市民プラザマルチスペース2
出席者：24名（他 市2名、コンサルタント3名）

～外遊びで育つ子どもの力～

講師：関戸 博樹氏

（特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会 理事）

【講座内容】

①開催挨拶・講師紹介

はじめのあいさつに続き、講師の関戸さんの紹介を行いました。

②「遊び絵地図ワークショップ」

参加者が自分の子供時代を振り返ってどのような遊びをしていたか、絵に描いてテーブルごとで発表し合いました。

③プレーパーク紹介

最近の子ども達の遊びの背景、子供の成長などを踏まえ、冒険遊び場の必要性や実際の活動内容を紹介されました。

④意見交換・質疑等

テーブルごとで今回の講座の感想などを話し合い、大人と子供のの差は何だと思ふかなど質疑に対して関戸さんからご回答をいただきました。



【講座の内容】

■現在の子供たちの遊びの背景

- ・人間関係にも都市化の影響が及んでいる。
- ・子供たちの遊び場が、遊びに行く距離も範囲も昔より狭まっている。
- ・第三者を挟んだ公園の苦情によってどんどん規制がかかり、使用者側にとってつまらない公園になっている。
- ・森・林・川など自然の中で遊ぶ文化が途絶えてしまっている。
- ・昔と現代では屋内と屋外での遊び時間は逆転している。
- ・都市化の結果、自信をなくし、自己肯定感の低い子どもが増えている。
- ・自己肯定感は遊びで生まれ、遊びに対しての満足度は子ども自身にしかわからず、遊びの中で自分の中に自信が生まれ、失敗を恐れなくなる。

■母親からのプレッシャー

- ・母親が子供に「他人に迷惑をかけない子供に育つこと。」を求めている。
- ・親自体が周囲や、親同士の間で感じるプレッシャーを受けている。

■子供の成長への影響

- ・転んだ時になど受け身が取れず、大きなケガをしてしまう事が多くなる。

■冒険遊び場

- ・子供達は自分で遊び場を作れるところを好む。
- ・日本の遊び場は、住民が主導、行政が支援する形が多い。（欧州は逆）

■日本の冒険遊び場

- ・今まで行政にとって、住民は苦情を言う存在だったが、冒険遊び場作りに携わる住民は、行政と同じ方向を向き、住民から直接コミュニケーションを取る存在となってくれる。
- ・苦情を言っていた住民はまちについて真剣に考えている人が多い。
- ・大人たちの仕事は、子どもたちが「遊びたい」と思う気持ちを100%発揮できる場所を作る事。

■子供の好きな遊び

- ・自分で環境を変えられる遊びが好き。（泥遊び、水遊び、火遊び）
- ・子どもたちは危ないことが何か大体わかっている。
- ・大人は危ないことが分かっていない子供に介入すべき。
- ・子供がやりたいと思っていない事を無理やりやらせるのは危険
- ・普段はやってはいけないこともプレーパークではある程度大目に見る。
- ・子どもたちが興味関心に合わせて触って見れるものが多く、自分の中で判断できたり、肯定できる経験を増やせる場所というのが大事。

■ナナメの関係

- ・色々な子や母親と関わることによって、それぞれの間に「タテ」ではなく「ナナメの関係」ができる。
- ・大人自身も遊び場作りを通して他の子と接することにより、自己肯定感が増えていく。
- ・冒険遊び場作りを通し、様々な人たちが自分にできることに気づいていく。

■まとめ

- ・遊ぶことを通してできる事を増やし、子供達の中に自己肯定感が生まれる。
- ・子供は自分にとって起こった辛い出来事を言語化できない為、遊びの中で再構築して理解しようとしている。
- ・子供は大人よりも感覚が鋭く、遊びを通して感覚が統合されていく。
- ・手におえる危険か手におえない危険を判断できる能力がある。
- ・刃物などの危険なものも子供の頃から少しずつ使い方を教えることによって自分で学習していく。リスク0の状態のまま成長する事がとても危険。
- ・運動神経は遺伝ではなく、運動はやればやるほど発達する。
- ・遊びを通して、子供も大人も本来自分ができる事に気づき、行動していく。
- ・行政・市民・プレーリーダーが何重にも協力し合うことによって、プレーパークやまちづくりを行っていくことが大切。

第1回 フレーパーク講座【結果報告】

日時：平成27年3月15日（日）15:00~17:00
場所：アステ川西6Fアステ市民プラザマルチスペース2
出席者：14名（他 市2名、コンサルタント3名）

～外遊びに必要な安全講習（おまけの第2部）～

講師：関戸 博樹氏

（特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会 理事）

【講座内容】

- ①リスクとハザードの概要説明
リスクとハザードについてのどのようなものがあるかを解説いただきました。
- ②「こんな時どうする？」
ワークショップ
いざという時のために準備しておくことを解説いただきました。
- ③応急救護のイロハ
様々なケガに対する応急救護方法を解説いただきました。
- ④意見交換・質疑等



【講座の内容】

■リスクとハザードについての概要説明

・リスク…子供が発生を予測できる有益な危険、ハザード…子供が発生を予測できない又は起きる結果が重篤すぎるもの。

■「こんな時どうする？」ワークショップ

・遊ぶ場所が不適切である場合、子どもが危険に気づかずにハザードが発生する場合がありますので、それぞれで動線を分けてあげる必要がある。

・落下、動線の順で発生確率が多い。子どもは気づかない可能性が高いので、大人が取り除いてあげる必要がある。落下、動線、突起物、摩耗・腐食、エンタラップメント（引っ掛かり）が取り除くべき代表的なハザード。

・これらに対応する1番の対策は、その場所をきちんと知る事。

・緊急指定病院、どんな診療科があるかを調べ、リストアップしておく。

■応急救護のイロハ【日本赤十字が行っている応急救護】

○切り傷の場合

・直接圧迫止血…幹部を直接手のひらで圧迫する止血法。その際に患部を心臓よりも高く上げる。他人を看護する際は、病気の罹患歴が分からない為、直接患部を触るのは避ける。

・傷に合わせガーゼや絆創膏サイズを変える。患部を水で洗い流せば、消毒液は特に使用しなくて良い。

・頭部傷の場合、傷が見えなかったり汚れている場合があり、髪を切る。

○刺し傷の場合

・特に踏み抜き傷の場合は血が出にくく、菌も出ない可能性が強いため、足をたたき血を出させる。消毒液（オキシドール）を使用し消毒する。

・子どもは処置の際、痛がって泣くので紛らわせてあげながら処置を行う。

○目の傷の場合

・何か刺さってしまった場合は、抜いた傷から更に悪化する場合がありますので、刺さったものを抜いてはいけません。三角巾を使用して処置を行う。

○打撲の場合

・頭部をケガしてしまった場合は、救急車を呼ぶこと。

○やけどの場合

・やけどは進行性のケガなので、なるべく早く冷やす必要がある。傷口に菌が入りやすく、感染症になる恐れがあるので、流水を行う。その際、患部に直接当てると痛みが増すので、患部より少し上から流し始める。

・やけどのサイズがその人の手のひらサイズになった時点で通院が必要。他にも、深さが関わっており、皮膚の色が赤、白、黒の順で重い。

○ハチに刺された場合

・市販のボイズンリムーバーを使用して患部を冷やし、病院を受診する。

○チャドクガ・イラガに刺された場合

・患部をガムテープ等を使用し刺さった毛を取り除いた後、患部を冷やして、病院で受診する。チャドクガは生体の他、死骸、抜け殻等全てが毒となっているので注意が必要。

○キョウチクトウ（植物）の煙を吸ってしまった場合

・毒性が強く、成人でも死に至る。どこにでもあるので、キョウチクトウが生えている個所で薪が落ちている場合は触れないように注意する。

○熱中症にかかった場合

・体が体温調節が効かなくなり、最悪の場合死に至る。処置としては、風通しの良いところに運び、スポーツ飲料等の水分を含ませる。ただ、意識を失っている場合は喉に詰まらせる場合がある為、水分を取らせてはいけません。頸動脈を冷やすのが良いが、完全に身体活動が低下している場合、体温が低下することがある為、その際は体を冷やしてはいけません。

○救急箱の中に常備しておく良いもの

・個包装のガーゼ、絆創膏、ラージカルテープ、綿棒、カット綿、爪切り、はさみ、手袋、ボイズンリムーバー、アイカップ、オキシドール、包帯（伸縮性じゃないもの）、メモ帳、ボールペン

○遊び場でケガをした際

・遊び場では、不特定多数の子どもが来て、かつ大人同伴でない場合もあるので、そこにいる大人が誠意をもって対応すべく、メモ帳を持っており、正確な情報を把握・伝達する必要がある。